

のぼりべつ

の 広報

11月2日(日)、千歳町のふれあい農園で、幌別小、幌別中の児童・生徒、PTA、教職員ら約100人が参加し、5月31日に植えた「きらら397」の稲刈りが行われました。

天候に恵まれた今年は、稲の育ちも良く、一面に輝く黄金色の穂が、子どもたちの笑顔をいっそう輝かせていました。

人が輝き まちがときめく ふれあい交流都市 のぼりべつ

特集

未来を映す時代の鏡

1997 No. 566
12/7

未来を映す時代の鏡



「少子化」や「児童生徒数の減少」と聞いて「さびしい時代がきたものだ。昔は子どもが多すぎると感じこそすれ、少なくともなんて考えもしなかった。確かに、子どもの数は少なくなってきたのかもしれない。でも、自分の生活には直接関係ない」と思いがちではないでしょうか。

「少年犯罪の増加や凶悪化」と聞いて「物騒な世の中だ。世の親はどんな育て方をしているのか」と、第三者としての冷やかかなまなざしで見つめているのではないのでしょうか。

子どもの数が減り、子育ての在り方が問われる今、「少子化」や「子育て」は、子を持つ親だけの問題なのではないか。

少子化ってなに？

「少子化」とは、文字通り生まれる子の数が減少することで、厚生省の人口動態統計によると、平成7（1995）年の出生数は約118万7千人。前年の出生数を約5万人下回り、現在のようない統計が行われるようになった明治32（1899）年以降、最低を記録しました。

昭和48（1973）年に200万人を数えた第2次ベビーブームを境に、年々減少してきた出生数。

少子化は、一人の女性が一生の間に何人子を生むかを示す「合計特殊出生率」をみることができます。





未来を映す時代の鏡

特集

合計特殊出生率が、おおむね2・08を下回ると、将来、人口が減少する可能性があるとされ、平成7(1995)年には1・42と史上最低を記録しました。

少子化の波は、私たちのまち登別市にも押し寄せています。

昭和48(1973)年の登別市の出生数は89人、22年後の平成7(1995)年の出生数は49人と大幅に減少し、合計特殊出生率は1・35と全国の数値よりも下回っています。

少子化が進むと社会の活力がなくなる?

少子化が進む原因として『男女の結婚観の変化による晩婚化や結婚しない男女の増加』『教育費などの子育て費用の増大』『女性の意識や生き方の変化』『女性の社会・職場進出』『仕事と家庭の両立の難しさ』など、さまざまなきっかけが考えられます。

出生数の低下による少子化が進むことで、私たちの生活は大きく変わるのでしょうか。

合計特殊出生率の減少が続くことを前提に、日本の将来の人口を推計すると、約100年後の平成102(2090)年の総人口は現在の約半分になると予測されています。

子どもが減り、人口も少なくなった社会とはどんな社会でしょう。

何十億もの人間がいるんだから、それが半分になったって大したことはないと思いますか。人口が半分になった100年後の社会は、少子化と並ぶもう一



つの問題『高齢化』が、今以上に深刻な状況を呈しています。

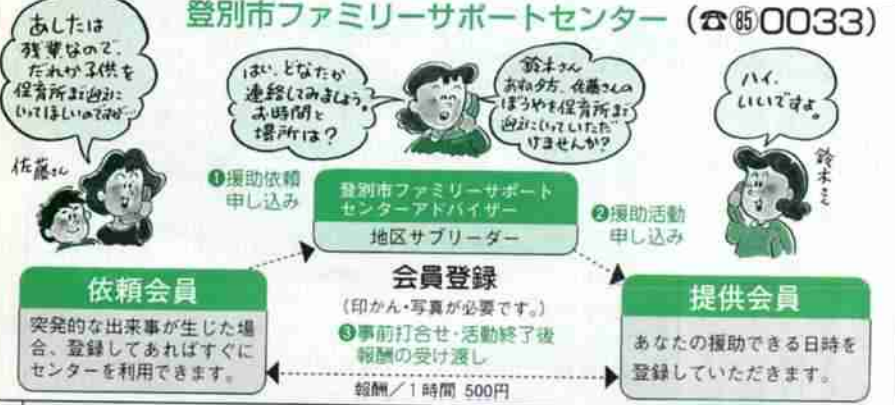
少子化と高齢化が進んだ社会では、結果として働き盛りの現役世代が減少することになり、年金や医療保険など社会保障費の負担の増加、労働力の不足、若年層の減少による活力の低下という暗雲が社会全体を覆っています。

登別市では、少子化と高齢化への対策としてさまざまな事業を行い、暗雲の払拭に努めています。

高齢化に対しては、在宅介護を支援する総合在宅ケアセンターの設立、老人大学など生きがいにつながる生涯学習事業の充実、シルバー人材センターの活用など、介護や生きがいづくり、高齢者の社会参加などに重点をおいた基盤づくりを進めています。

少子化に対しては、働きながら安心

登別市ファミリーサポートセンター (☎0033)



めぐもりのあの子育てを進めています

登別市ファミリーサポートセンター
主任アドバイザー 福川短子さん

ファミリーサポートセンターには、設立当初から携わっています。センターの主任アドバイザーになる前は、27年間小学校教諭として勤めていました。仕事を持つ女性にとつて、子育てと仕事の両立は難しいことかもしれないけれど、働くお母さんのために保育所などがありますが、センターは保育所で預かることのできない時間や日曜日、病気の子どもなどの保育など、保育所だけでは対応することができない部分を補います。昔は、同居しているおじいちゃんやおばあちゃん、近所のおじいさん、おばさんに子どもを預けることができたけれど、核家族化が進み、近所付き合いも昔ほど活発ではない今、気軽に子どもを預けることが難しいお母さんが増えていきます。また、子育ての相談に乗ってくれる人が近くにいないため、子育てで悩んでいるお母さんも少なくありません。センターは、子どもを「預かる」「預かる」といった仲介だけではなく、子育てについての相談も受け、子育てに悩むお母さんの心の支援もしています。

子どもを預かる提供会員は、子育てを終えた方や元保母といった経験豊かな方ばかりです。提供会員になるとときには、私たちアドバイザーが面接をし、センターの仕組みを理解してもらい、子どもを自宅に安全に預かることができるかどうか、じっくりと話し合います。例えば、包丁など刃物の管理方法はもちろん、植木鉢にさしてある液体肥料など子どもが口に入れる恐れのあるものはどうなっているかなど細かいところまでチェックします。また、事故があったときのために、子どもと提供会員を対象に補償保険に加入しています。もし、センターを利用するかどうか迷っているお母さんいたら、ぜひ一度利用してください。

センターの目指す子育て支援は、近所のおじいちゃんやおばさんが気軽に子どもを預かってくれるような、めぐもりのある子育て環境の輪を広げることです。

子育ての支援を受けたいと考えているお母さん、まず、センターにご連絡ください。そして、子育てを支援したいというお母さん、あなたの温かい援助の手をお待ちしています。



して子どもを生み、健やかに育てることができ、環境づくりを市民・企業・行政が一体となって進めるため、子育て支援総合計画（エンゼルプラン）をつくり、その実現に向けたさまざまな事業を展開しています。

登別市ファミリーサポートセンター

子育て支援総合計画は、市民の意見を反映させるため、福祉や教育、経済の関係者が集まり意見交換を行った「子育て支援総合計画推進会議」や市民を対象に行った「子育てについての意識調査」をもとにつくられたもので、仕事と子育ての両立支援や家庭における子育てを支援し、子育てを取り巻く環境の整備を進めていこうとするものです。

子育て支援事業には、さまざまなものがありますが、中でも平成8年8月1日に設立された「登別市ファミリーサポートセンター」（しんた21内 ☎0033）は、新たな子育て支援の一つです。

ファミリーサポートセンターは、子

子どもには常に話しかける習慣を！

渡辺亮子さん（60歳）・若草町



今年の1月に、近所の方に勧められ、提供会員としてファミリーサポートセンターに登録しました。月に1人か2人の割合で、1歳から3歳くらいまでのお子さんを預かっています。預かる時間は、1時間から2時間くらいが多いですね。私は昔から子どもが好きで、良く親戚の子どもや近所の子どもを預かって世話をしていました。子どもはいたずらをするから苦手という方もいますが、私はあまり気になりませんね。

子どもはいたずらをするのが当たり前ですから、いたずらをされたり、物を壊されたりするのが嫌なら、最初から子どもの見えないところにしまっておくのが一番ですよ。子どもは珍しい物を触りたがりますからね。子どもの手の届くところに置いて「触っちゃダメ」というのはかわいそうですよ。

預かったお子さんには、自分の子どもを育てたときのようように接しています。子どもは明るく元気なのが一番。まず、けがをさせないように、そして、その子に合わせて子どものおもちゃになってやるんです。「お馬さんになって」といわれればお馬さんに。「運動会しよう」といわれれば、家の中で大運動会ですよ。特別、何かをしてあげるわけではないんです。でも、時にはしかることも大切です。お客さんが来ているときに、子どもが悪いことをしたら、その場でしかることが大切なんです。よく、お客さんが帰ってから、しかるお母さんがいるようですが、あれはいけませんね。後になって怒られても、子どもには何のことが分かりませんよ。それと、しかる時はちゃんと理由を言ってあげることです。

あと、子どもには常に話しかけてあげることですね。子どもに背中を向け、料理をしているときでも「今日どんなことしてたの」と話しかけることが大事なんです。子どもの心を独りぼっちにしたら子どもがかわいそうですよ。子どもは子どもで常に大人に気を使っています。一人で我慢もしています。その子の心を分かってあげることが大切です。子どもにはちゃんと通じてますよ。若いお母さんたちには、自分からいっぱい子どもへ話しかけて、さびしい子どもが増えないようにしてほしいですね。

育ての援助を受けた人（依頼会員）と援助したい人（提供会員）の双方が会員となり、依頼会員が通院や残業、急用などのとき、提供会員が子どもを保育所などへ送迎したり、提供会員の自宅で預かるなどの仕組みで、地域での子育てを支援するものです。

登別市ファミリーサポートセンターは、平成9年10月1日現在、全国に23カ所のファミリーサポートセンターが開設、またはその開設が予定されている中、道内で唯一設置され、市が登別市社会福祉協議会に委託し運営されています。

依頼会員や提供会員になるための資格や入会金、会費などは全く不要で、会員登録をしておけば、センターのアドバイザーやそれぞれの地区のサブ

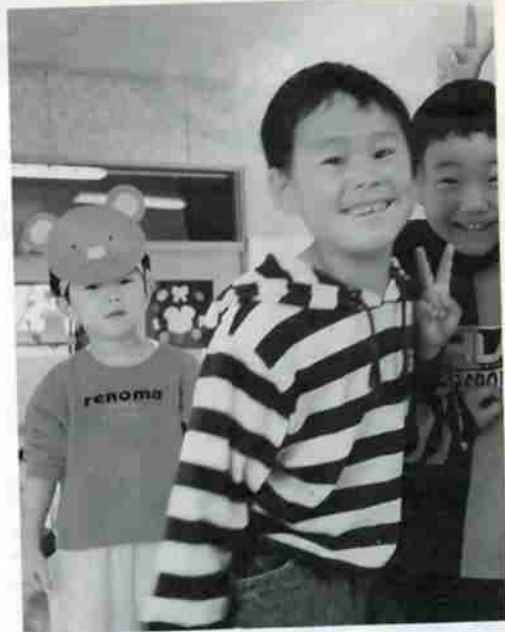


▲しんた21内のファミリーサポートセンター

リーダーを通していつでも援助を依頼することができ、援助終了後に提供会員へ1時間につき報酬として500円（土・日曜日、祝日は600円）を支払うもので、従来の保育施設などでの保育とまったく異なります。

平成9年9月末日現在、センターには依頼会員133人、提供会員37人、依頼・提供両方会員23人の計193人が登録され、地域での子育てが行われています。

- ① 保育施設の保育開始時間まで、子どもを預かる。
 - ② 保育施設の保育終了後、子どもを預かる。
 - ③ 保育施設まで子どもの送迎を行う。
 - ④ 児童館終了後、子どもを預かる。
 - ⑤ 学校の放課後、子どもを預かる。
 - ⑥ 子どもが軽度の病気になったときなどに、臨時的に終日子どもを預かる。
 - ⑦ そのほか、会員の仕事と育児の両立のために必要な援助を行う。
- など、子育てをする親の要望に応じることができるよう、さまざまな方法が想定されています。
- 援助の対象となる子どもは、小学校卒業までの幼児と児童で、長期間にわたって子どもを預かるものではありません。
- また、子どもを預かってもらった後、



依頼会員が提供会員に報酬を渡します。提供会員は金銭のために育児の援助をしているわけではなく、子どもの好きな方や育児経験のある方、地域の中で子育ての援助をしたい方などが、ボランティアの一つとして活動しています。

地域での育児援助に連携を!

核家族化が進み、高齢者と同居する家庭が少なくなった現代、気軽におじいちゃんやおばあちゃんに子どもを預けることが難しい家庭が増えています。また、地域での連帯感や隣近所の交流も少なくなり、隣の家の子どもを、愛情を持ってしかなかったり慈しんだりするぬくもりのある人間関係も希薄になってきているといわれています。

以前、「カギっ子」という言葉がやはり、共働きの親を持つ子どもの教育環境が問題視されたことがありました。それから十数年がたった今、「カギっ子」という言葉を耳にすることもなくなり、共働きも一般的な家庭環境の一つとなりました。

子育てをしているお母さんの交流の場を!

中西ゆみこさん(27歳)・輝くん(1歳9カ月)・鷺別町



マタニティーサークルで知り合った友人から、昨年の11月ごろ、ファミリーサポートセンターのことを聞きました。その後、『広報のぼりべつ』で、利用方法などを知り、今年の春に主人と二人で依頼・提供両方会員になりました。

結婚前は札幌に住んでいましたが、主人が室蘭市内の会社に勤めているものから、結婚と同時に鷺別に引っ越してきました。登別には知り合いもいませんでしたから、息子が生まれたときは、不安でしたよ。初めての子育てで、分からないことが多く、近くに相談に乗っていただけの方もいませんでしたから。結婚と同時に勤めていた会社をやめて、主婦業に専念していますので、いつも子どもと一緒にいることはできるんですが、私が歯医者や病院に行くときは、そうもいかないんですね。一緒に連れて行くわけにもいきませんし、かといって気軽に預けていくことのできる知り合いもいませんし。ファミリーサポートセンターに登録して、提供会員の方に初めて息子を預けるときは心配でした。まったく知らない人に預けるわけですし、人見知りするようになってきたものから、泣いたらどうしようかと考えましたね。でも、そんな心配は最初だけでしたよ。提供会員の方は、保母さんだった方や、お孫さんが同じくらいの歳だとか、とにかくあやし方が上手なんですよ。子育ての経験も豊富ですし、いろいろとアドバイスもしてもらいましたよ。1時間500円は、安いと思います。ほかの市の託児所のようなところでは、1時間1千円くらいかかると聞いたことがあります。全国のファミリーサポートセンターの中でも、登別が一番安いとも聞きました。

道内には、まだ登別にしかないそうですね。これから、もう一人子どもをつくらうかなと考えているんですが、センターがあるととても心強いです。

子育ての悩みはみんな同じようなものがあると思うんですよ。子育てをしている同世代の方と知り合う機会も少ないので、センターで会員を対象に月に何回かお茶会なんかを開いて交流の場を持ってほしいです。センターが子育てをしているお母さんの情報交換の場になれば素敵ですね。

幼児期における生活環境は、子どもの人格形成面などに大きな影響を与え、時代がどんなに移り変わろうとも、親は子どもに「健やかに優しく情愛深い人に育ってほしい」と望みます。しかし、教育費や住宅環境などさまざまな要因が、満足のいく子育てを阻みます。子どもがどう育つかは親の責任といわれますが、親だけがすべての責任をとるのは難しい時代になってきたのかもしれない。

殺伐とした少年犯罪が増加し、子どもたちの心の荒廃が問題となっており、親の愛情に勝るものはないとはいいますが、親が常に子どものそばで愛情をそそぐことができない家庭はどうす

ればいいのでしょうか。

歯止めが少なくなっている今こそ、子ども数が少なくなっている今こそ、子育てというものを地域で考えていかなければならないのかもしれない。血縁上の親ではなく、地域という親が子どもに愛情をそそいでいく必要があるのではないのでしょうか。

しかし、地域での子育てといっても簡単にできるものではありません。ファミリーサポートセンターは、あくま

▼しんた21 (片倉町)



でも地域での子育てを進めるための第一歩であって、これですべてが整ったわけではないですね。

子どもたちが大きな愛情に包まれ、見守る大人たちも充実した生活を送り、子どもや大人にとって、互いに住み良い環境を整えていかなければ、少子化と高齢化を克服することはできないのではないのでしょうか。

子どもは、時代の鏡です。鏡に映しだされるものは、子どもの心ではなく、私たち大人の考え方や心の在り方です。今、私たちが真剣にこの問題に取り組んでいくことでその鏡を、そして子どもたちの未来を曇りのないものにするのではないのでしょうか。



今年度の工学院祭のテーマは「Brand-new sight (新しい視点)」で、既存のものを新しい視点で見つめ、新しい一歩を踏み出そうというものです。

体育館では、建築学科学生の手作りによる全長



第16回工学院祭が、10月25日(土)から26日(日)にかけて、札幌市の日本工学院北海道専門学校(中山浩資学長)で行われました。

科学技術をまるごと満喫

113の木製コースでミニ四駆大会が開かれ、チビッ子たちはミニ四駆を手に、白熱したレースを繰り広げていました。

また、校内では各学科ごとにさまざまなコーナーが設けられ、高



速走行する車の映像に合わせ、運転座席が左右に動く「体験横Gコーナー(電気工学科)」やパソコンで好みの写真をシールにするコーナー(電子工学科)、コーヒーサービスロボットやラジオコンサッカークーナー(機械制御工学科)などに訪れた市民の人気が集まっていました。

下水道使用料金の改定を答申

市長から下水道使用料金と水洗トイレ改造等融資あっせん制度の改定について詰問を受け、審議していた下水道事業運営審議会(石井憲一会長、委員10人)からの答申が11月5日(水)にありました。

答申は、下水道の中継ポンプ場の建設や既存施設の維持管理など経費の増大が予想されるため、現在の下水道使用料金を4年ぶりに11・49%の上げ幅で改定するもので、半年間の周知期間をおいた後、来年7月1日から



間をおいた後、来年7月1日から実施を予定しています。

さらに、最近のトイレ水洗化工事費用の高騰に配慮して、排水設備などの工事資金の貸付限度額を、現在の48万円から59万円(排水

水道部は「健全な下水道事業を運営していくために、今回の改定はやむを得ないものです。市民のみなさんのご理解とご協力をお願いします」として、今回の改定案を12月議会に提案し、審議される予定です。

水設備工事費21万円、水洗トイレ改造工事費38万円)に引き上げるとともに、排水管の延長によって排水設備工事費が21万円を超えたときは、超えた額の2分の1を貸付限度額に加算する制度も新たに設けることとし、来年4月からの実施を予定しています。

勲五等瑞宝章



いづから ひろし 岩倉 博さん (75歳)
登別東町4丁目43-1

自動車運送事業振興に尽力されました

秋の叙勲

岩倉さんは、室蘭市内で運送業の新興産業の社長として陣頭指揮にあたり、ともに、全道約2千800社が加盟する北海道トラック協会副会長や胆振・日高地区を網羅する室蘭地区トラック協会会長、室蘭地区自動車協会会長として運送業界の発展に尽力されました。

「物流関連業界は競争が激しく、過積載や安全管理といった問題の解決だけでなく、業界の秩序を維持することに腐心してきました。業界の融和を図りながら、前向きに行動することにも心掛けてきました。この受賞は、物流関連団体や関係者のみなさんのご支援とご協力のたまものです。今回の受賞をステップにして、業界が抱えている諸問題を分析、解明しながら、業界の発展に寄与できればと考えています」と力強く受賞の喜びを語ってくれました。

藍綬褒章



しのほらたかあき 篠原孝明さん (64歳)
栄町4丁目7-2

議員活動25年間、地方自治の発展に尽力されました

篠原さんは、昭和46年、登別市議会議員に初当選以来、7期25年にわたり議員として活躍されるとともに、各常任・特別委員会正副委員長、議会運営委員会委員長、市議会副議長として要職を歴任され、市政の発展に尽力されました。

「このたびの受賞は、大変光栄に思います。多くの市民の方や先輩の指導のおかげだと思えます。明治22年に屯田兵として室蘭市の輪西地区と登別市の富岸地区に入植し、苦勞してきた父祖の開拓魂を心にとめながら、市のまちづくり

に努力してきました。これからは一次、二次産業の振興はもとより、高齢化社会に向けた福祉の充実を注いでいきたいと考えています。この受賞に恥じることなく、初心にかえってこれからも努力していきます」と決意も新たに受賞の喜びを語ってくれました。

奉

奉

平成9年度の登別市功
労者表彰・登別市民表彰
の式典が11月3日(月)、市
民会館で行われ、地域の振
興・発展に寄与した受賞者23
人の功労をたたえました。

今年の市功労者は、社会福
祉の向上に尽力した秋山宥盛
さんと相原亮平さん、交通
安全に尽力した中牧昇さん、
地域医療の向上と伝染病
予防に尽力した山本俊
一さん、学校歯科医とし

て児童生徒の健康管理に尽力した
堅田勇さんの5人。
また、市民表彰者は、自治貢献
表彰3人、社会貢献表彰9人、教
育文化貢献表彰1人、人命救助に
よる善行表彰5人の計18人。

午前10時から行われた式典で
は、登別文化協会謡曲部による能
楽仕舞が厳かに演じられた後、市
長が式辞を述べ、受賞者一人ひと
りに表彰盾を贈り、長年の苦勞を
ねぎらいました。

来賓祝辞の後、受賞者を代表し
て秋山宥盛さんから「本日のこ
の感激を忘れることなく、決意
を新たにしてい市政の発展のため、より一層の努力をしていき
ます」と受賞の喜びが語られま
した。



市民のきずなでまちづくりを

10月25日(土)、市民会館で「21
世紀まちづくりシンポジウム」
(登別商工会議所青年部、登別
青年会議所、登別青年会共催)
が開催されました。

このシンポジウム(討論会)
は、市内で活動しているまちづ
くり団体のネットワークづくり
をさらに発展させるために開催
されたもので、多くの市民が聴
講に訪れました。

第1部の講演では、テレビな
どでおなじみのジャーナリスト
櫻井よしこさんを講師に迎え
「高齢者に配慮しつつ、全体の
調和を考えたまちづくりを進め
ていくべき」など、外国や日本
の都市を例にあげたまちづくり
への提言がありました。

第2部のパネルディスカッシ
ョン(公開討論会)では、講師
の櫻井よしこさん、札幌市の三
島啓子さん(株式会社北海道都市再
開発促進協会)や地元でまちづく
りにかかわっている石井憲一さ
ん(登別市都市計画審議会委員)、
飯沼良幸さん(21世紀ま
ちづくり実行委員会委員長)、
廣瀬至さん(登別地域大学事
務局長)が出席し、それぞれの
立場からまちづくりについて意
見交換が行われ、「やる気のある
若者の情熱が必要」「市民同士
の対話ときずなが必要」など明
るく豊かなまちづくりを目指す
提言が熱く語られました。



櫻井よしこさん

夫婦二人三脚いたわりあつて

11月15日(土)、登別温泉町の極
楽通りでエンマ堂金婚式(登別
観光協会主催)が行われました。

今年で2回目を数えるこの金
婚式は、結婚50周年を迎える夫
婦が、うそや偽りを嫌うエンマ
大王の前で、変わらぬ愛を誓い、
長寿と健康、除災を祈願するもの。

この日は、道内各地から応募
があった35組の中から、抽選で
選ばれた8組の夫婦が出席しま
した。

「これからも助け合いながら、



夫婦円満に暮らすのじゃ」という
エンマ大王の宣託を受け、8組の
夫婦を代表して、美園町の佐藤信

夫さん(74歳)・みつ江さん
(72歳) 夫妻が「これからも、
いたわりあつて、うそ偽りのな
い夫婦生活を送ります」と誓い
の言葉を述べ、これまで二人で
歩んできた50年の月日を振り返
りました。

8組の夫婦の中には、札幌市
や苫小牧市など市外から出席し
た方もみられ、伊達市から出席
した夫婦は「この金婚式は娘が
応募してくれて、当選の通知が
来たときは何のことかわかり
ず、娘に聞いてようやくわかり
ました。生涯忘れられない贈り
物です」と喜びいっぱいでした。

「きずな。市民と市民との心のつながり」



また、会場からは阪神大震災
でボランティアに参加した方か
らも提言があり「現地で活動し
ていて地域活動の大切さを実感
した」とまちづくりに対する地
域活動の大切さを訴えていました。



▲高規格救急車の内部



▲救急出動は、3署（本署・登別温泉支署・鷺別支署）あわせて年間1,500件を超えます

市民リポート

消防署の救急救命業務

24時間、命を守る男たち

昼夜を問わず、急病人やけが人などを、病院へ搬送する白い車。私たちもいつ救急車のお世話になるかわかりません。「ヒーロー、ヒーロー」と音は派手でも、救急隊員たちの活動は地道で確実・迅速です。

しかし、その地道な活動の実態は意外と知られていません。

そこで、今回は登別市の救急救命業務の一端を紹介したいと思います。

登別市消防署を訪ねました

登別市の救急救命業務の中核「登別市消防署」は市役所の裏にあります。

そこには、火災時に欠かすことのできない「消防水槽（タンク）車」と「ポンプ車」、油などによる火災時に出勤する「化学消防車」、交通事故など救出作業時になくはならない「救助工作車」、火災現場での的確な指示を出す「指令車」、日ごろから火災の予防を呼び掛ける「広報車」、火災の原因な

どを調査する「原調（原因調査）車」、そして、今回のリポートの目的の一つでもある「高規格救急車（※）」が、いつ起きるか分からない火災や急病人に対応するため待機しています。

消防署の2階には、火災や救急の通報に即座に対応し、的確な指示を出すための指令室があり、火災発生時には支署や各消防車へ指令がとびます。

※一般の救急車よりも車体が大きく、救急救命用の機器などを装備している救急車。

救急救命は医師の指示で的確に

用途別に分けられ、素早く火災を鎮火する消防車は、その能力をいつでも発揮できるよう整備されています。また、消防職員も常に厳しい訓練を行い、その激務に耐え得る体づくりを続けています。「人の命を守るといふことは大変なことだ」と思いつつ、先ほど紹介した「高規格救急車」で救急救命業務に携わり、救急救命士の国家資格を持つ吉田雅宣さんに話を聞きました。

「登別市消防署には、救急救命士の国家資格を持つ隊員が二人配置されています。救急救命士は、医師の指示に基づいて、従来よりも一歩踏み込んだ救命処置が可能で、三つの特定行為を



市民リポーター

まつばら じょういち
松原 條 一 さん
(新生町・51歳)

行うことができます。一つ目は、心臓停止状態にある患者さんに、器具を使用した気道確保、二つ目は停止した心臓を再び動かすための電気ショック、三つ目は点滴注射などの輸液処置です。

でも、この特定行為を行うには、医師の指示が絶対条件となっています。救急救命士への指示には高規格救急車の自動車電話が使われます。救急車の中には心電計があり、そのデータは病院に待機している医師のモニターに送られ、それを見て医師は救急救命士に指示を与えます。救急隊員と医師の連携で、現場での正しい救命処置を行うことができます」と話してくれました。

救急車の配置はどうなっているの

取材当日の当直責任者である小杉利夫さん（保安係長）に、救急車の配置などについて聞きました。

「救急車は登別温泉支署に1台、鷺別支署に1台、そして本署（登別市消防署）には高規格救急車が1台配備されています。この3台が東西約18キロ、南北約22キロを縦横に走りまわり活躍しています」と小杉さんは話してくれました。

本署配属の高規格救急車の中を見せ

▼救急車が配備されている登別温泉支署



▲人形を使って、蘇生法を習得



▲救急車が配備されている鷺別支署



でもらいましたが、まるで動く病院です。現場での応急処置に必要なさまざまな器具、通信設備、常に水平を保つように工夫されたベットなどがあり、その数々の設備にただただ驚くばかりです。救急救命士による特定行為は、今のところ日鋼記念病院（室蘭市新富町）の協力により、午前9時から午後5時まで行っているそうです。市民の一人としては、救命率を向上させるため、早く24時間体制を実現してほしいものです。

現場での応急処置が命を救う

救急隊員にとって一番切ないのは、現場に到着して家族などに「すぐ病院に運んでくれ」と泣きながら訴えられたときだそうです。

「救命のため、現場での応急処置がどうしても必要な場合があります。そのため、病院までの搬送に時間を要することがあります。応急処置の時間が必要とはいえ、ご家族の気持ちはわかるだけにつらいものがあります」と小杉さんはいいます。仕事とは言え、本当に大変だと感じました。



▲「救急現場では応急処置が必要です」と話す小杉さん

注意したい携帯電話から消防署への緊急通報

ここ数年の携帯電話の普及には、目を見張るものがあります。携帯電話は、急ぎのときや、外出先では便利なものですが、しかし、携帯電話からの119番通報は避けたい方がいかもしれません。

なぜなら、たとえ登別市内からの通報でも、携帯電話からかけるとすべて札幌市消防局につながり、それから登別市消防署に連絡が入るからです。全道各地からの携帯電話による札幌市消防局への通報件数は、昨年の1月から三月までに8千68件。そのうち登別市内からの通報は21件あったそうです。

通報には、携帯電話を避け、最寄りの公衆電話などを使いたいものです。ただし、PHS（簡易携帯電話）は、直接、登別市消防署に通報が入るので心配はないそうです。

救急の知識と技術を身につけよう

目の前に人が倒れていたらどうしたらいいのでしょうか。

登別市では、119番通報を受けてから救急隊が現場に到着するまでの所要時間は約6分だそうです。もし応急処置の技術や知識があったら、命を救うことができるかも知れません。

統計によると呼吸停止から4分後の救命処置の開始で、一命を取り留める確率は50%。10分後には、ほぼゼロになるそうです。呼吸停止に陥ってからいかに早く蘇生法を行うかが生死を分けることはいまでもありません。

「家族など身内が倒れた場合の蘇生法は必ず役に立ちます。救命には一刻も早い通報と心肺蘇生法、救急隊による早い処置、そして医療機関へとつなぐ連携が大切です」と吉田さんは話してくれました。

応急処置の講習会はいつでも受け付けます

呼吸と脈がない心肺停止状態の人に、見よう見まねでも何かしたほうがいいとわかってはいても、いざとなるとあせってしまうのではないのでしょうか。

応急処置の正確な知識や技術があれば、救命に効果があることは間違いありません。せめて、家族が急に倒れたときのために応急処置を習得しておくこと強いものがあります。

応急処置の講習会は職場単位、町内会、趣味の会などある程度まとまった人数であれば、だれでも講習を受けることができます。応急処置の講習を希望される方は、消防署（☎551）までご連絡ください。

普段、救急車を見掛けても、健康の大切さを考えることはあまりありません。何かあったときに、すぐ救急車が駆け付けてくれるのは非常に心強いことではあります。日ごろから健康を心掛け、救急車のお世話にならないことが一番です。また、救急車には一刻を争う急病人などが乗っています。車を運転しているときは、救急車を見つけたら速やかに車線を譲り、救急業務の手助けをしたいものです。

いきいき ボランティア

『書道は活人への道』



常盤町の川島辰雄さんは、しんた21で行われている心身障害者アイ・サービスの書道講座の講師としてボランティア活動を行っています。

以前、中学校教諭としてクラブ活動などで生徒に書道を教えていた川島さん。退職後は趣味として書道に親しみ、作品づくりに精を出していたところ、登別市福祉協議会から依頼を受け、平成9年4月から書道講師のボランティアを始めました。

「手本を書くときは、題材に季節感のあるものを選び、変化をつけるように心掛けています。また、受講者の希望を取り入れたり、楽しみながら書道を学べるように工夫しています。書道の基本は楷書なんです。基礎ができると行書や草書などへ進みます。受講者の方は、とても熱心に取り組んでいますよ」と語る川島さん。



11月からは、筆で書いた年賀状を出すことを目標に、はがきと同じ大きさにした半紙を使って指導しているそうです。

登別市シルバー人材センターの理事長も務めている川島さんは「人にはそれぞれ長所と短所がありますが、長所を伸ばすためには、まず良いところを評価してあげることです。それによって意欲もわいてきますし、前向きに取り組めるようになります。書道講座を通じて、私自身も趣味を生かすことができるので、いつまでも続けていきたいですね」と話してくれました。

▼ボランティアについての問い合わせ

わせ 登別市社会福祉協議会ボランティアセンター(☎2080)

ちょっとひとこと

楽しかったこと、悲しかったこと、うれしかったこと、市への疑問や意見・要望などを企画広報室へ電話やはがき、封書、ファクスでお寄せください。

企画広報室 中央町6-11 ☎1122 FAX☎1108

ちょっとひとこと

切実なテーマで

考えさせられました

広報のほりべつ10月1日号「いつまでも我が家で暮らしたい」を読みました。

高齢化社会の話はよく耳にしますし、人ごとではないと常々思っていました。高齢者が人生の最期を迎える場所に、我が家を望むというのは本当に実感として分かります。

私も主人の母の最期を看取り、子育ても終えた今では、私が高齢者と呼ばれる年齢になろうとしています。

記事の中では、高齢者の願いや在宅介護のことが分かりやすく書かれ、自分が高齢になったときどうすればよいか考えさせられました。人間誰でもいずれは歳をとると分かっているのですが、老後の生活について考えると、どうしても暗いイメージが頭に浮かんでしまいます。でも、記事の中では、老いを楽しんでいる人の話が書かれ、切実なテーマなのに暗さを感じま

せんでした。

地域ぐるみで、高齢者への対策を考えるのは本当にいいことだと思います。若い世代の人が高齢者のことを考え、私のようにもうすぐ高齢者になるものや高齢者も、若い人の負担にならないように頑張っていかなければならないんですね。

(若草町 主婦)

大事にしていきたい

登別の自然

幌別川に、今年も白鳥が来ましたね。毎年、越冬のために飛来する美しい白鳥の姿を楽しみにしている方が多いと聞きますが、私もその一人です。白鳥の姿を見ると「ああ、もうそんな季節になったんだ」と冬の訪れを感じます。白鳥テラス(幌別川下流)で、白鳥と遊ぶ子どもたちの姿は、本当にはほほ笑ましいものです。これからも白鳥が登別を訪れ、ゆつくりと羽を休めることができるよう、登別の自然を守っていききたいですね。

(富士町 会社員)

ちょっとひとこと

紙面上では匿名でも氏名、住所、電話番号をお知らせください。なお、個人や団体への中傷や営利を目的としたお話はご遠慮ください。

ちょっとひとこと

仲間たち

いぶりたすけ愛

代表 星川光子さん

(☎0262626)

『支え合い 助け合う心を』

『いぶりたすけ愛』は、会員同士が互いに助け合う住民互助型のボランティア団体として、在宅福祉活動を行っています。

「福祉ボランティアに携わっていたとき、大阪府堺市に今までにないボランティア団体が活動していることを知りました。さっそく現地に赴いて話しを聞き、その活動内容を目的の当たりにしたとき、これから必要になるボランティアはこれだと思いました」と星川さん。

『いぶりたすけ愛』は、その前身の『登別ライフケアを考える会』として平成5年4月に発足し、室蘭市の方が会員になったことを契機に平成9年4月『いぶりたすけ愛』と改称しました。

現在の会員数は約200名で、家事援助や軽度の介護サービス、通院などの移送サービスを中心に活動しています。この住民互助型のボランティアは、道内に13団体しかなく、全国的にもまだ少ないそうです。



新川町に事務所を構え、助け合いの市民組織としてみんなで協力しながら取り組んでいます。

車両が1台しかなく行動範囲が限られてしまうのが悩みだそうです。

「高齢化社会を迎えて、介護を必要とする方が増加していると聞いています。介護の必要な方に、必要とされるサービスを提供していきたいですね。将来的には会員制ではなく、誰でも参加できるようにボランティア団体にしていきたいです」と星川さんは話してくれました。入会を希望する方は星川さんまでどうぞ。

がらび

こだわりの一品

『手焼いもいもてん』

〜わかさ屋菓子舗

(富士町)〜

「職人としての心意気とこだわりがこの『手焼いも』の隠し味。

お客様に喜んでもらいたい。だから素材を吟味する。うまいものをつくりたい。だから手づくりでこだわります」と若狭社長。

昭和32年の創業以来、職人の心意気とこだわりの味を守り続けてきた若狭社長は今年で83歳。

「若いころは菓子職人として室蘭で働き、その後、独立して自分で店を持ちましたが、支店も出さ



腐剤などを使わず、あんを練るのも焼くのもすべて手づくり。姉妹品として販売されている『いもてん』は、手間暇かけてつくられた『手焼いも』に衣をつけて揚げたもので、温かいうちに食べるとまたひと味違ったおいしさが口の中に広がります。

ず宣伝もしませんでしたね。ただ、ひたすらにお客さまの喜ぶ顔を見たくて『手焼いも』をつくり続けた40年でした」と笑う若狭社長。

「事前にご連絡いただければ、揚げたての『いもてん』も販売しています。『手焼いも』は道内・本州を問わず電話で注文がくるんですよ。宣伝もしないかわりに、お客さまが口コミで宣伝してくれているんですね。お客さまがうちの支店です」と話す若狭社長の『手焼いも』には、菓子にかける職人の心が込められています。

▼問い合わせ わかさ屋菓子舗 (富士町1-3-1 ☎2670)

あまなろ



井守千代美さん (18歳)

登別伊達時代村勤務

登別伊達時代村の日本伝統文化劇場で、江戸人情芝居の役者として活躍している井守さん。

現在は、『吉野太夫の初恋』で花魁の卵の役を演じ、主役を除く支える重要な役を務めています。

今年の4月に高校を卒業したばかりの井守さんは石川県野々市町の出身。夏には、家族を登別温泉に招待し、久しぶりに家族水入らずの時間を過ごしたそうです。

「役者になりたくて、この世界

に入ったんです。日舞のけいこや、せりふの暗記など、今までにない経験に初めはとまどいましたが、毎日が新鮮で楽しいですね。公演は一日4回あるんですが、毎回緊張します。でも、お客さまの『頑張ってるね』という声援と笑顔にいつも勇気づけられるんですよ。将来は、みなさんに夢を与えられるような役者になりたいです」と話す井守さんの力強い言葉に、未来の大家女優を予感させました。

きんぐら

『思い出を今後の交流の糧に』

李^リ 尚^{サン} 倍^ベさん (33歳)

(登別市協力交流研修員)

自治省の自治体職員協力交流事業で、6月に来日し、滋賀県大津市で日本の文化や生活習慣、行政の仕組みなどについて研修を受けた韓光州(こうくわう)廣域市(くわういき)職員の李さん。7月から登別市協力交流研修員として、市観光課で観光行政をテーマに研修を積み、12月中旬の帰国を目前に控えた李さんに話を聞きました。

◎登別の印象はどうですか

◆「道路が整備され、緑が多く、市民のみなさんは親切ですので、住みやすいまちと感じました。また、登別温泉は、地獄谷や大湯沼



など豊かな自然に囲まれた素晴らしい温泉ですが、残念ながら韓国ではあまり知られていません。帰国した際には、ぜひ多くの人に登別の良さを宣伝したいですね」

◎研修ではどんなことをしていますか

◆「おもに北海道と登別の観光概要や行政の観光に対する取り組み方などを学んでいます。また、登別温泉街のホテル・旅館や飲食店、土産店の関係者を対象にしたハンゲル講座の講師を務めたほか、テーマパークやホテル・旅館のパンフレットをハンゲルに翻訳する作業にも携わりました」

◎印象に残った思い出は

◆「豊水まつりや地獄まつりに参加したこと。韓国の祭りは、参加する人だけが楽しむものなんです。でも、地獄まつりでは、地元住民と観光客が一体となった鬼踊りなど、韓国では見られない催しや祭りの規模の大きさに驚かされました。私も、重さ1kgの鬼みこしの担ぎ手になり、地獄まつりの楽しさを肌で感じる事ができたので、いい思い出になりました」

◎これからの抱負をお聞かせください

◆「国際交流に関連する仕事に就いて、研修で学んだことを生かしたいですね。また、韓国への理解を深めてもらうために、登別の中学生をホームステイで受け入れるなど、登別と韓国の交流の輪を広げていきたいと考えています」

大学時代に日本語を学び、日本語能力認定2級を持つ李さん。会話に不自由ないので、登別で生活していても他国にいると感じたことはないそうです。李さんの思い出を胸に、李さんは帰国の途に就きます。

遊遊自適

佐々木孝一^{ささきこういち}さん (66歳)

富岸町

『レクリエーション活動の普及に熱き思い』

「北海道から出場して優勝するなんて夢にも思いませんでした。長年やってきた活動の成果が実り、達成感を伴った今までにはない感動を覚えました」と語るのは、今年9月に山形県で行われた『全国福祉健康まつり(愛称ねんりんピック)』ウオー



クラリーの部で優勝した佐々木さん。出場したウオークラリー競技は、レクリエーション(余暇などを利用した休養・娯楽)活動の一つで、地図を頼りにチェックポイントごとに主催者から出された問題を解き、5

ほどのコースを回ってゴールに要した時間と設定された時間との差を競うもの。チェックポイントでの問題は、橋の長さを歩幅で計ったり、手で持っただけで、どれだけ正確に100gの石を選ぶことができるかなど、日常生活での体験と五感が高得点へのカギとなりま

す。佐々木さんがレクリエーション活動に興味をもったのは、20年ほど前に子ども会で歌やゲーム、ダンスを始めてから。最初のころのレクリエーション活動は、屋内が主流でしたが、今では屋外での活動が盛んになってきているそうです。また、佐々木さんは、登別レクリエーション協会の設立以来の会員で、現在、事務局長を務めているそうです。

「レクリエーション活動は自分が楽しまなければ、長続きしません。会員の中には夫婦で楽しんでいる方もいらっしゃいます。レクリエーションでは、山

情報 あらかると

市民会館エレベーター 設置工事のお知らせ

市民会館の正面玄関横で、エレベーターの設置工事を行っています。

工事期間中は、ご不便をおかけしますが、ご協力をお願いします。

▼工事期間 平成10年3月25日(水)まで

▼問い合わせ 社会教育課 (☎1100)

市民プール 休館のお知らせ

市民プール(千歳町3丁目)は、12月15日(月)から3月31日(火)まで休館します。

▼問い合わせ 文化・スポーツ振興財団 (☎1116)

登別高校定時制 一日体験入学のお知らせ

登別高校定時制は、平成6年度から、働きながら学ぶ青少年だけではなく、広く教養を高めたり、新しい技能を求める社会人や主婦の方に、生涯学習の場として積極的に学校を開放しています。

今年度は、40〜70歳代の市民が、

書道、ワープロ、生物、国語、社会などを楽しく学んでいます。この機会に、社会人の方の学習の様子を見学し、夜間定時制で学ぶことの楽しさを体験してみませんか。

▼月日 12月10日(水)

▼時間 17時30分〜19時30分

▼場所 登別高校(定時制)

▼内容 授業参観(ワープロ、日本史、国語)、特別給食の会食、

定時制・社会人入学の説明

▼申し込み・問い合わせ 登別高校(定時制) 藤野さん

(☎2911)

踏切事故に 気をつけましょう

踏切手前で止まりきれなかったり、踏切内で立ち往生して、列車と衝突する事故が発生した場合の被害と補償額は甚大です。

「冬道は滑る」と心に言い聞かせ、踏切事故に気をつけましょう。

◎踏切に近づいたら
・踏切手前で早めにブレーキを踏み、確実に停止できる速度に落としましょう。

◎踏切内で車が動かなくなったら
・踏切に非常ボタンがあるときは、列車が近づいていなくても、すぐにボタンを押ししましょう。

・非常ボタンがないときは、車に備えてある発煙筒などで合図しましょう。

◎遮断機がおりて、踏切に閉じ込められたら
・あわてずに遮断機を押し出して脱出しましょう。

犯罪や事故のない 年末を!

12月は、強盗や空き巣、ひったくりなど、犯罪の発生が多い時期です。

安全で平穏な年末を過ごす、明るい新年を迎えるためには、一人ひとりが普段の生活の中で犯罪に遭わないための注意が必要です。「どうすれば犯罪を防げるのか」をこの機会にもう一度考えてみましょう。

▼問い合わせ 室蘭警察署

(☎0110)



路面凍結が発生するこれからの季節は、スリップによる自動車事故が多発します。

郵便局からのお知らせ

◎年賀状は12月15日(月)から引き受け開始

年賀状を元旦に届けるには、なるべく12月24日(水)までに出してください。

◎郵便番号が7けたになります

平成10年2月2日(月)から、郵便番号が7けたになります。今度の年賀状は、あなたの郵便番号を7けたで記入してください。

郵便太郎様



◎年賀状を出すときは

①郵便番号、あて名はもちろん、住所は、番地、肩書きまで記入してください

②私製はがきなどで年賀状を出すときは、「年賀」と赤で書いてください

③はがきを投函するときは、あらかじめ「市内」「道内」「道外」「年賀」と朱書きした私製はがきの4種類に区分けしてください

登別市の新郵便番号

問い合わせ 登別郵便局 (☎2200)

町名	新郵便番号	町名	新郵便番号	町名	新郵便番号
ア 青葉町	059-0027	シ 新川町	059-0015	フ 富士町	059-0014
カ 柏木町	059-0017	チ 新生町	059-0032	ホ 幌別町	059-0013
片倉町	059-0016	ト 千歳町	059-0003	ミ 美園町	059-0036
上登別町	059-0552	ナ 中央町	059-0012	緑町	059-0024
上鷺別町	059-0031	ト 常盤町	059-0011	ヤ 大和町	059-0025
カルルス町	059-0553	富浦町	059-0462	ラ 大馬町	059-0004
川上町	059-0022	富岸町	059-0028	ワ 若草町	059-0035
コ 鉦山町	059-0021	ナ 中登別町	059-0463	山町	059-0026
サ 幸町	059-0002	ノ 登別温泉町	059-0551	鷺別町	059-0034
栄町	059-0033	登別東町	059-0464		
桜木町	059-0023	登別本町	059-0465	上記に記載がない場合	059-0000
シ 新栄町	059-0001	登別港町	059-0466		
札内町 (5、9、11-12、36、42-2、62、80、95、184、231、389-2、499、500番地)	059-0005				
札内町 (その他)	059-0461				



このまちが 好き

魂の旋律

伝統と芸術の融合

不思議なステージです。ある人は「自然そのものに身体ごと包まれた」。また、ある人は「神を感じた」と語ります。

「モシリ」は、アイヌの祖先が伝承してきた精神、歌、踊りをもとに現代のアイヌ芸術の創造を試みるグループです。

魂の旋律のステージへ、ぜひお越しください。

○アイヌ詞曲舞踊団「モシリ」公演

▼日時 2月12日(木) 開場17時30分、開演18時30分

▼場所 市民会館大ホール

▼演奏曲目 シロカニペランラ
ン(銀のしずく降る降る)、
エムシリムセ(剣の舞)など

▼入場料(全席自由) 大人2千円、小・中学生1千円

※なお、未就学児の入場はお断りしますので、ご了承ください。

▼チケット取扱先(12月10日(水)から) 市民会館、アーニス、総合体育館、市役所内売店、紀文堂書店(登別駅前)、ブックアベニューいりえ(若草町)

▼問い合わせ 文化・スポーツ振興財団(☎011-116)

となりまち

ホットライン

室蘭市

一九九八年の幕開けは地球岬で

新しい年の幕開けを地球岬などの景勝地で迎えてみませんか。次の3カ所では、地元の町会などが甘酒やホットミルクのサービスを行います。ご家族やカップルで、ぜひご参拝ください。

▼日の出時刻 7時5分ごろ

▼場所 地球岬、イタンキ浜、マスイチ浜

※地球岬とマスイチ浜周辺は交通規制を行います。また、駐車場は限りがあるため、なるべく乗用車の利用は控えてください。

▼問い合わせ 室蘭市観光振興課(☎011-76)

伊達市

NHKの番組「ひるどき日本列島」で

伊達市を全国放送

毎週月曜日から金曜日まで、全国各地の地域を紹介しているNHKの昼の番組「ひるどき日本列島」の中で、伊達市の市役所通り商店街が全国放送で紹介されることになりました。

今回は、「シリーズふるさとの商店街」と題して、商店街の花屋のご主人を案内役に、森本健成アナウンサーのリポートで、武家屋敷風の商店街を生中継で放送する予定です。ぜひご覧ください。

▼放送日時 12月12日(金) 12時20分～12時45分(生放送)

▼番組名 「ひるどき日本列島」シリーズふるさとの商店街(北の湘南・お武家さまが通る)

▼放送局 NHK総合テレビ

▼問い合わせ 伊達市企画課(☎011-423333)

